

# 13世紀仏語散文における従属節中の語順

L'ordre des mots en subordonnée de la prose française du XIII<sup>e</sup> siècle

浅野 幸生

Yukio ASANO

我々は既に、フランス語の（書き言葉の存在する）最古の段階において従属節中の語順がどのようなものであるかについて若干の調査を試みた。<sup>(1)</sup> 9世紀半ばに書かれた『ストラスブールの誓約』の中に現れる従属節は、今日のドイツ語に見られるのと同じような枠構造をとっている。そのおよそ300年後の12世紀前半に書かれた武勲詩（韻文）においても一かなり現代語の語順に近づいているとは言え—まだその名残を十分に残している。<sup>(2)</sup> この調査に関して我々が大変残念に思う点が二つあった。まずストラスブール以前の文献が存在しないためラテン語からガロ=ロマン語に至る語順の変化を辿ることが不可能なこと。音声の変化が断片的な語彙集からでもある程度再建可能なのに比べると、統辞レベルの変化は一定量以上の文書が無ければその時代の状況を把握することはできない。<sup>(3)</sup>

もう一つは資料に関する妥協を余儀なくされたことである。ストラスブールから11世紀末まで断続的に現れる作品はラテン詩の影響を強く受けたもので、音声や語彙の研究にはともかく、語順の研究にとっては大きな障害に感じられる。また12世紀の本格的な文学作品は殆ど全て「韻文」であるため、音節数や半階音(assonance)の制約により本来の語順が歪められている可能性があり、それを常に頭に入れて作業を進めていかなければならないことになる。それでもフランス語のできるだけ古い段階の語順の調査が本来の目的だったので、12世紀前半の方言色の少ない韻文をコーパスとして選択した。

調査の結果は上述の通りであるが、この結果を補強するために我々に一つの課題が残されることになった。それは初期の「散文」—フランス語では13世紀初頭に現れる—において、同じ調査を試みることである。それによって、多少時代が下ってしまうのは残念であるが、韻文の時のように曇りガラス越しに観察するようなまどろこしさからはかなり解放されるであろう。コーパスとしては、殆ど同時期に同じタイトルで、異なる著者によって書かれた二冊の本を使用する。

## 1. 調査の対象となる形式について

調査の対象となるのは従属節で、出発点における（つまり最も初期の段階の）語順は仮説として次のようになっていたと考えられる。<sup>(4)</sup>

従属接続詞 [主語 (S) + 目的補語 (O) + 動詞 (V)]

L. Foulet 以来文の三要素 (S, V, O) によって文構造を表すことが多かったが、実はこのやり方では大雑把すぎて適切でないことが明らかになってきている。<sup>(5)</sup>

例えば主語は名詞 (Sn) の場合と代名詞 (Sp) の場合があり、それぞれの頻度と文型としての容認可能性は同じではない。<sup>(6)</sup> さらに代名詞の場合表示されないことがあり (S-nul)、これも区別して考えるのが適切であろう。

目的補語は直接と間接があるが、それぞれについてやはり名詞と代名詞の場合がある。語順が問題になるのは名詞の場合だが、直接目的補語と間接目的補語が名詞としてそろって出てくる例は少なく、限られた調査の中では両者の順番について確かなことは言えない。

動詞については活用した定動詞が単独の場合と、それが助動詞 (Aux) で不定詞や過去分詞につながる場合があるが、現代語とは反対に定動詞が末尾に来るのが初期の語順と考えられる。主節においては特に、助動詞と不定詞・過去分詞が何らかの要素を介して分離するケースも多く見られ、これらを一括して動詞句と捕らえることは分析のためには有効ではない。従属節における枠構造の残存率を調査する場合、定動詞と不定詞・過去分詞の位置関係はかなり決定的な基準になる。<sup>(7)</sup> 前回の調査でも、12世紀前半の韻文の最初の500行の中にこの定動詞後置の例が7例も見いだされる。

12世紀後半(正確には1165～1170年頃)の韻文作品 (*Erec et Enide*) には次のような従属節が見られる。

- ① qui le blanc cerf ocirre puet (S + O + Inf. + Aux)  
② qu'il voloit le blanc cerf chacier (S + Aux + O + Inf.) <sup>(8)</sup>

両方とも主語－助動詞－不定詞－直接目的補語から成っているが、配列は異なる。我々はドイツ語の枠構造に似る①の形を出発点と仮定しているわけであるが、すぐ近くに②の形も確認される。②においては定動詞が主語の後に付き－つまりV2の形を取っているが、動詞に支配される目的語はそれに前置されている。ここに我々は、近代化しつつも古来の構造から完全に抜け切れていない従属節の形を見ることができる。

本稿では、コーパスの中の従属節に古い構造の残滓がどれだけ見出されるかについて調査す

る。その際、上例 ① のような典型的なケース（時代的に考えても、それほど見いだせるとは思えない）から微かに面影の残るケースまで、枠構造の原理を再解釈した上分類して統計を出し、それに基づいて当時の状況について考察してみたい。ただ古仏語の実例に当たっていつも思うことだが、代名詞主語の省略だけでなく、現代語であればおそらく必要と思われるような要素が表現されず、その結果、文が極端に短くなり語順を問うこと自体無意味に思われるケースが少なくない。

## 2. コーパスの文体について

おそらく 12 世紀は語順の脱ゲルマン化が急速に進んだ時期であり、それだけに最初の散文の登場を 13 世紀まで待たなければならないのは研究者として残念でもあり、焦れたくもある。13 世紀初頭に『コンスタンチノープル征服』(*La Conquête de Constantinople*) と題した散文作品が、Villehardouin と Robert de Clari という二人の作家によって著された。<sup>(9)</sup> 二人とも第 4 回十字軍に参加しており、事件の一部始終を観察し作品の中でそれぞれの視点から記述している。ただ前者は身分の高い貴族として参加しているのに対して後者は単なる一兵卒に過ぎず、それが視点のみならず文体の相違としても如実に現れているのは興味深い。シャンパーニュとピカルディという異なる方言域に属しながら、どちらも飾り気のない素直な文章で書かれているため語順の研究にとっては打ってつけの素材と言える。

W. von Wartburg はこの二作品を含むこの時代の散文作品に共通する特質として、「従属文よりも並列文を好み、それは散文に、何かきびきびした印象を与えるが、同時にまた小間切れの感じも起こさせる」と述べている。<sup>(10)</sup> 確かにそこには現代語に見られるような緻密で計算された文構成というものはあまり見られないかもしれない。しかし従属節の数自体は相当多く、現代語なら不定詞で表現するような場合も節を用いる場合がよく目に付く。従って、小間切れと言うより冗長な感じを与える場合も少なくないのである。

- ③ ... l'apostolle envoya en France, et manda al prodome que il preechast des croiz par s'autorité  
(... le pape envoya en France et manda au prud'homme de prêcher la croisade par son ordre)

Vil. 2

- ④ ..., et si lor dist que il oissent messe del saint Espirit ..., Vil. 25  
(... et il leur dit d'entendre une messe du Saint-Esprit ...) <sup>(11)</sup>

また現代語であれば同格的に表現するところを、まめに関係詞を用いる傾向がある。

⑤ Li dux de Venise, qui ot a nom Henris Dandole, ... les honora mult, Vil. 15

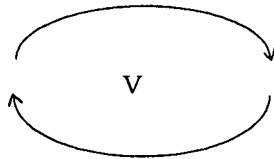
(Le duc de Venise, Henri Dandole, ... les reçut avec grand honneur,) <sup>(12)</sup>

Clari においては、時の接続詞 *quant* の連用など、現代文ではとても受け入れられないような書き方が見られるが、このような無作為さが逆に語順の問題の資料としての価値を高めているのも確かである。

### 3. 従属節の枠構造

枠構造とはゲルマン語に特徴的な配語法のことであるが、主節の枠構造と従属節のそれとは異なる。主節においては動詞を文の二番目に据えるため、それを中心として他の要素（主に主語・目的補語・副詞）が必要に応じてピヴォットすることになる。ただし無標の語順は、主語—動詞—目的補語である。<sup>(13)</sup>

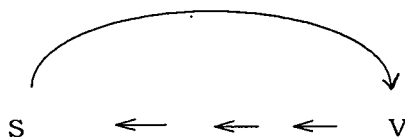
【主節の構造】



従属節はそれ自体文の構成要素であるから、主節の枠構造の中にありながらそれ自身の中でも「下位の」枠構造を作っている。そこでは主語から一旦文末に至ってから文頭に向かって逆流するような形になっている。

【従属節の枠構造】

従属接続詞



この言わば内部循環的流れがゲルマン的従属節構成法である。

現代語の語順とは性格を異にする枠構造の特徴を次のようにまとめることができるであろう。

- ① 主語と動詞が従属節の左端と右端に位置し、その他の要素はその中に入る。
- ② 動詞が二つ以上の要素からなっている時、定動詞 (Aux) が後置される。

ここではこれらの特徴がどのような形でどれだけ残っているかを調査するわけだが、残って

いたとしても多くは断片的なので、ケースをより細分する必要があるだろう。語順の問題に限って言えば、構成要素とそれらの組み合わせの数を考慮しても、有標—無標の二項対立では対応しきれないだろう。標準的という意味での「無標」の語順は存在するとしても、有標の場合は有標の程度が様々であり、おそらくは語用論的観点から各々説明されなくてはならないと思われる。<sup>(14)</sup>

#### 4. 統計と解釈

以下は、Villeshardouin の中に現れる従属節を文型ごとに整理し、統計を取ったものである。語順の実態や現代語との差異ができるだけ明確になるように、特殊な基準によって分類している。<sup>(15)</sup>

調査の対象は従属節で、主語・動詞を含む三要素以上で構成されているもの。(コーパスの中には839例現れる。)この中で現代語とは異なる語構成を示している例は117例確認された。従属節においては、主節の場合と異なり、枠構造における主語の位置が元々固定されているため、名詞と代名詞の区別はさほど重要ではない。定動詞は単独の場合はVで一要素、不定詞・過去分詞などの補助的要素(V<sub>2</sub>)がある場合はAuxで表し併せて二要素とする。

補語(C)は、代名詞以外の目的語(C<sub>1</sub>)・二音節以上の副詞および副詞句(C<sub>2</sub>)・主格補語(C<sub>3</sub>)、つまり現代語であれば動詞の前に出ないようなものを指す。<sup>(16)</sup>下付数字がない場合はそれらを総称している。

現代語と異なる文型	生起数	%
S - V <sub>2</sub> - Aux*	12	10.3
S - C - Aux - C - V <sub>2</sub> **	49	41.9
S - C <sub>1</sub> - V	12	10.3
S - C <sub>2</sub> - V	17	14.5
S - C <sub>3</sub> - V	9	7.7
S の後置	9	7.7
それ以外	9	7.7

\* Cの位置・有無は問わない。

\*\* CはA u xの前後に最低一つは現れる。

杵構造の最も顕著な特徴である〔V<sub>2</sub>-A u x〕は12例 (*conseiler que il faire ne soffrir puissent*, Vil.19 ; *si cum eles chevauchier devoient*, Vil.158)。わずか半世紀程前の韻文には頻繁に見られたことを考えるとこの数は少ないように思えるかもしれない。だが13世紀初頭の散文に、現代語では絶対あり得ないこの形がこれだけ現れるならば、当時の一少なくとも従属節に限って言うならば一語順が到底現代語と同質とは言えないだろう。とは言え、A u x-V<sub>2</sub>の形が大勢を占めていることは数字的にも間違いない。その場合でも現代語とは異なり、直接つながりのあるV<sub>2</sub>よりCが前に出ている(*qui voloit l'ost depecier*, Vil. 81; *qui l'ost voloient depecier*, Vil. 199)。ここで非常に興味深いことは、Cが単独の場合主語と動詞(V<sub>2</sub>)の間に入るのに(*qui a la terre d'outremer est avenuz*, Vil. 38; *quant il ot ses genz raliez*, Vil. 180)、Cが二つ以上あってそのうちの 하나가直接目的補語である場合後者が殆どの場合動詞の後ろに位置するということである (*qui s'en aloit en Puile conquerre la terre*, Vil. 33 ; *que il por Dieu tenissent l'ost ensamble*, Vil. 97)。杵構造の動詞に関する特徴はほぼ崩壊していても、S-V間の進入に関しては新たな規律ができつつあったようだ。

コーパスの中でほんの僅かでも杵構造の痕跡を残している例は99例で、全用例の11.8%である。前節で述べた従属節の二つの特徴①②が、両方とも見られる例が原型に近い。そのうちの一方だけが見られる例においては、どちらが杵構造を強く残しているかを言うのは難しい。ただこの二つの現象は、変化の過程において互いに関連し合い、一つの調和に向かって行つたに違いない。

語順についてはスタートとゴールは見えているのだが、もし変化の動機が判れば、その間の様々な変異の間に杵構造残存率の高低を割り当て、それに従って古さの序列を設けることも不可能ではないだろう。言語研究はある共時態—たとえばここでは13世紀初頭—という作業上の仮構を設けて行われるわけであるが、語順に限らずあらゆるレベルのあらゆる局面においてそれまでの様々な時代の残滓を蓄積している。その古さは必ずしも話し手の意識と一致するとは限らないが、色々な意図を持って意識的にまたは無意識に話線に登場してくる。一旦研究者が共時態という設定をしたからには、その中で新旧の序列を設けること自体にそれほど意味は無いかもしれない。意味があるとすれば、その中に変化の方向や力学が垣間見られた時であろう。

## 5. 従属節内の変化

フランス語の初期の段階で顕著に見られた杵構造が、数世紀の間にどのように、そしてなぜ

変わったかについて仮説を提示してみたい。

フランス語の初期の枠構造の起源になったと思われるゲルマン語流の枠構造は、配語法という物理的な捉え方から離れて見れば、主節と従属節を異なる原理で構成することにあると言えるであろう。現代フランス語は、わずかなケースを除いて、主節と従属節を同じ原理で構成する言語である。従って、この隔離した二共時態間の語順の変化を主語・述語等の構成要素の並べ替えの変化と捉えるならば、本質を見誤るであろう。

フランス語の従属節に何が起こったのであろうか？枠構造が崩壊したということは、その特徴が失われたということに他ならない。第3節で挙げた二つの特徴が失われたモチベーションについて考えてみよう。

①について。現代フランス語では目的補語は、代名詞の場合動詞に前置し、名詞の場合後置する。古仏語の古い段階では、名詞の場合も動詞の前に置かれることが多い。このような言い方自体が知らず知らずのうちに目的補語を中心に見ていることになるのだが、この変化を別の視点から見ることもできるであろう。すなわち、S - On - V が S - V - On に変わったということは（前述の通り、13世紀初頭にはその傾向がかなり進んでいたのだが）、S と V が隣接したということである。現代語のように名詞目的補語が動詞に後置されるようになったのは、動詞が主語に引き寄せられた結果そうならざるを得なかったとも考え得るのである。

②について。動詞が定動詞と補助動詞からなる場合、従属節の末尾で〈補助動詞一定動詞〉の形になるのは枠構造の最も顕著な特徴である。前節の統計の中では12例確認されている。この形が忠実に守られた時期があったとしても、それは極めて初期の段階であり、その後は一頻度の差はあっても一上記のオプションの中から複数のものが現実には現れることになる。

定動詞と補助動詞が逆になる場合、離ればなれになる場合、文中の位置も一定していない。主節の場合と異なり、ここでは語用論的動機はほとんど働いていない。各時代のそれぞれのコーパスにここで見られたような複数の形式が確認された時、これまではしばしば語順の自由さの現れということで片づけられた。ところが数世紀の幅をとって見てみると、そこには明らかに近代的語順への方向性とでも言うべきものが見られる。

ここで②の失われた特徴を二つに細分すると次のようになるであろう。

②' 〈補助動詞一定動詞〉以外に〈定動詞—補助動詞〉の形が発生する。

②" 末尾指定であった動詞が、文中の他の位置—特に主語の後—にも現れる。

これらの新しく現れた特徴は紛れもなく主節のそれである。

## 6. 結論

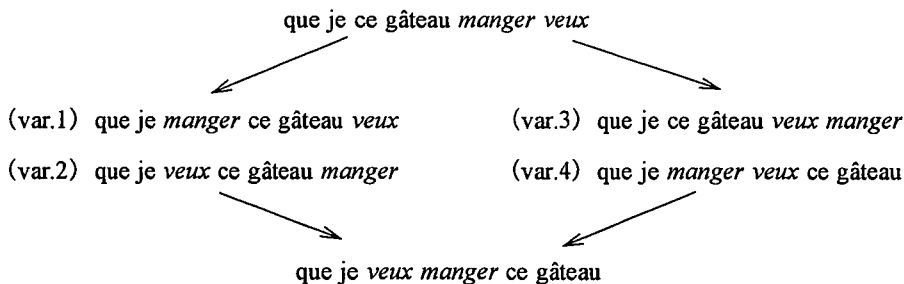
多くの研究が証明するように、フランス語は極めて早い段階に動詞を二番目に据える傾向を

確立していた。ラテン語は動詞を文末に置くことが多かったことを考えれば、この配語法は外から入ってきたものだとする方が自然である。<sup>(17)</sup>ただこれは主節での話であって、従属節にあってはこれまで見てきたようにこれとは異質の配語法が中世では主流であった。そして13世紀には、その痕跡をある程度とどめながらも、現代語の語順にかなり近づいていることも明らかとなった。ここで問題となるのは、主節の語順はその原理において一オプシオンの数は減少したものの一変化しなかったのに、従属節はなぜこれほどの変化を被ることになったのかである。

前節で見たように、従属節の変化の特徴は、見方を変えれば主節への接近であると言える。目的補語が動詞に後置され、その結果としてV2に近づくことも、〈補助動詞一定動詞〉が〈定動詞一補助動詞〉になることも、動詞が文末以外に位置することも全てその時まで主節の中でほぼ確立されていた現象である。<sup>(18)</sup>

ここまでの考察から、フランス語の従属節が先行して確立されつつあった主節の語順を、後追いついて同化して行ったと結論することに無理は感じられない。ゲルマン語流の主節と従属節を異なる原理で構成する形から出発し、次第に従属節が主節に同化することにより、近代語の主節と従属節を同じ原理で構成する形に移行して行ったのではないだろうか。

その過程で働いた力学を(1)動詞(V<sub>1</sub>, V<sub>2</sub>)の分離⇒動詞の密着、(2)V2の確立<主節からのアナロジー、と特徴づけるならば、ここで扱ったコーパスに現れる様々な従属節の語順の間に大体のクロノロジーを想定することも可能になってくる。



つまり、動詞の形態と位置についてそれぞれ別々の動機が作用して、かなり複雑な変化の過程を辿ることになった。<sup>(19)</sup>たまたま輪切りにした一つの共時態においていくつもの形式が同時に確認された時、それぞれの持つ意味を見抜くために最も頼りになるのは頻度であり、連続した異なる時代間の変化について考える時は各形式の頻度の変化こそが決め手になるであろう。そうでなければ、自由さや両立性ばかりに目を奪われて言語の内部で進行している現象を見逃してしまうことになる。古仏語のようなあらゆる意味で流動的な言語においては、一層そ



れが言えるのではないだろうか。

## 7. おわりに

言語の使用に当たっては、常に過去の使用例が規範となる。教養の豊かな人ほど規範に通じ、そこから外れることに抵抗を覚える傾向が見られる。ここで扱った二人の作者のうち Villehardouin は、校訂者の Faral が言うように、基本的には自然で口語的な文体を使用しながらも自らの記述内容に対して一そしておそらく文体に対しても一ある種の意図を持っていたことが伺われる。従って、散文だからといって当時の口語の語順をそのまま反映しているとは必ずしも言えない部分がある。

それに対して、Clariの方が作為が少ないという意味では口語的で当時の語順により近いように思える。実際、彼の作品の中には  $V_2 - A u x$  の形はほとんど見られない。目的補語が  $V$  の前に出ることであっても、 $A u x - V_2$  の形は保たれる (qui le greigneur conseil pooit metre, C. 4 ; le moitié qui armes porront porter, C. 6)。時を表す従属節においても Villehardouin がしばしば倒置形を用いているのに対して (quant ce oï li dux, V. 83 ; quant ce vit li hos des perlins, V. 180)、Clari は平叙文の形を迷わず用いる (quant li marchis oï che, C. 3 ; quant li conte et li homme croisie oïrent chou que li dux avoit dit, C. 12)。しかし考えてみればこの場合、どちらも  $V_2$  の原則に従っているわけで、その意味では主節に近づいた近代的な語順と言えるのだろう。この違いを生み出したのはおそらく両者の文体に対する意識の差であり、前者が従属節にそれでもまだ主節とは異なるものだという意識を若干持ち続けていたのに対して、後者にはそれが殆ど残っていなかったのであろう。<sup>(20)</sup> Villehardouin の方にむしろ、先人たちの伝統的語法と巷で主流になりつつある語法の間で迷う姿が見られる。

いずれにせよある時代の語順を探る上で、散文が韻文より遙かに頼りになることは論を待たない。登場の時期が遅いため、我々は肝心の変化の過程を間接的な調査法と想像によって補わなくてはならないが、所々に垣間見られる過去の痕跡を丁寧に検証することによって空白を埋めることは不可能ではないだろう。

## 【註】

- (1) 浅野 (1997) 参照。
- (2) *Le Charroi de Nimes*.
- (3) 実際、11世紀以前の語順の実情を把握するのは極めて困難である。ストラスブールに現れる少数の実例も、当時の俗語の語順と断定するにはいくつかの障害はある。ただ浅野 (1997) でも述べたように、諸事情を考慮に入れれば、この誓約の語順は当時の俗語のそれとかけ離れたものではないと考える方が妥当である。
- (4) 古仏語においてS-O-V型は、平叙文においては稀だが従属節においては頻繁であった (Foulet, 1930, p. 316)。
- (5) S, V, Oの三要素による配列では、6通りの語順のオプションが得られる。Marchello-Niziaは主語を名詞 (Sn)・代名詞 (Sp)・ゼロ (S-nul) の場合に分け、さらに文頭に「関与的な」(目的補語以外の) 補語 (C) が立つ場合を加えて、19通りの実現可能な文型を挙げている。これまでの文型の研究は何が可能なのかに重点が置かれすぎていて、可能な文型の中で何がどれだけ一般的なのか (つまり頻度の問題)、また何が不可能でその理由は何かという議論がともすれば欠けていたことは否めない。
- (6) 例えば古仏語において動詞—目的補語—主語という形自体頻度の低いものであるが、それでも主語が名詞の場合には稀に確認されるのに対して、主語が代名詞の場合は殆ど全くと言っていいほど確認されないと言う (Marchello-Nizia, p.55)。
- (7) この場合の不定詞・過去分詞を動詞句中の二番目の要素という意味で  $V_2$  と表示し、動詞第二位の  $V_2$  と区別することにする。
- (8) Ch. de Troyes : *Erec et Enide*, édition et traduction par M. Rousse, Flammarion, Paris, 1996. 引用文例は45行目と37行目から。
- (9) 使用した版は以下の通りである。Villehardouin : *La Conquête de Constantinople*, éditée et traduite par E. Faral, Paris, Société d'édition « Les Belles Lettres », 1973. Robert de Clari : *La Conquête de Constantinople*, traduction, introduction et notes par Alexandre Micha, Série « Bibliothèque médiévale » dirigée par Paul Zumthor, Christian Bourgois éditeur, 1991.
- (10) p. 104 (翻訳は p.110)
- (11) ③ ~ ⑤は Villehardouin から。括弧内の現代語訳は校訂者の Faral による。Clari にも «..s'en alerent tout droit tant qu'il vinrent a Genvres (s'en allèrent directement jusqu'à Gênes), C.6 » のような例が見られる。以下文例の後に、その作者名 (Vil. = Villehardouin, C. = Clari) と何節に現れるかを

記す。

(12) *Faral* は直訳風に関係代名詞を用いている。実際 *Clari* においてもそうだが、使用される関係節は異常に（おそらく現代語よりも）多い。これはおそらく同格や前置詞・不定詞を用いた連体修飾表現が未発達だったためであろう。

(13) ゲルマン語においては当然主節も（従属節とは異なる）枠構造をとる。しかしフランス語の主節においては、最も古い段階に遡ってもその痕跡は見当たらない。フランク人がラテン語を自らの言語として採用し始めた時、彼らがこの「融通性のある言語」をどのような形で使っていたのかについては全く推測の域を出ない。

(14) *Marchello-Nizia* も（主節に関してであるが）古仏語の語順が強調等の様々な語用論的要請によって変化すると主張している。これまでともすれば自由度ばかり強調されてきた古代語の語順に、機能による分類を導入するのは画期的な視点と言えるだろう。鈴木(2000)では、比較的自由だと言われるイタリア語の語順が、実際にはその決定に際し語用論的な動機が強く作用する傾向があると述べられている。ロマンス諸語の中で一番語順が厳密であるとされる現代フランス語でも、主語が長く目的補語が主題化（*thématisation*）か強調を受けている場合は〈V-O-S〉も可能になり（*Payeront une amende tous les professeurs qui...*）、可能か不可能かという問題で言うなら、現代フランス語はV2の法則よりむしろ、名詞直接目的補語が動詞の直後にこない形（O-V-S、S-O-V、V-S-O）を拒絶する傾向があると言う（*Marchello-Nizia*, p.37）。

*Marchello-Nizia* 自身も認めているように、「話し手」のいない言語についてこのような観点からの研究を進めることは極めて困難ではあるが、一般論が確立されるに従ってそれを古代語に適用するという道は開けるかもしれない。

(15) 範囲は第一章 (*Les origines de la croisade*) から第六章 (*Premier siège de Constantinople : Alexis IV empereur*) の全 205 節。

(16) どこまでを主格補語と見なすかは難しい問題である。*être* 動詞の後の名詞は問題ない。形容詞の場合、主語の属性を述べているもの（つまり動詞が *copule* である場合）と本来過去分詞であるものの区別がつきにくい場合がある。

(17) カエサルの『ガリア戦記』第二巻において、主節で84%、従属節で94%の動詞が文末にある。ところが四世紀にエゲリアという名の女性が書いた聖地への巡礼記では、動詞が文末に来るのは、主節で25%、従属節で37%しかないと言う（『日本大百科全書』小学館「ラテン語」の項）。この事実は、主節におけるV2の傾向がいかに早く始まったかを示すと同時に、定動詞文末という枠構造を受け入れる素地が元々ラテン語の従属節にあったということも示している。

(18) この時期にはおそらく、先行して確立していた、あるいは確立しつつあった二つの形式が従

属節中の語順に強い影響を及ぼしていた。一つは言うまでもなく主節で、コーパスの中にも明らかに主節の V2 の原理の影響を受けているものが見られる (*que por noient demandast on home plus richement vestu*, Vil. 185)。もう一つは不定詞句 (*por la honte Jesu Crist vengier et por Jerusalem conquerre*, Vil. 18 ; *a leur ost maintenir*, C. 12) で、従属節の補語 (C) がなかなか動詞の後方に定着しなかったのは、この直接目的補語を抱え込む形式が後ろ向きの強いアナロジーとして働いていたためかもしれない。

(19) Var. 1 はコーパスの中に一例も登場しない。それは、この形式が一つの論理上の選択肢でありながらも、当時の配語法に二重に違反しているためであろう。Var. 2 (*puis que il ot la croiz prise*, Vil. 33), Var. 3 (*cil qui a autres porz estoient alé*, Vil. 67 ; *qui armes porront porter*, C. 6), Var. 4 (*que perdue avoit la veüe*, Vil. 67)

(20) 両者の間には当然共通点もあり、例えば属詞 (主格補語) は動詞の前に出る (*qui Flamenc estoient*, C. 1)。これはおそらく *qui coisié estoient* のような当時の紋切り型表現からのアナロジーが働いていたためなのだろう。

— 東京外国語大学の川口祐司先生、東京音楽大学の鈴木信五先生には、文献の紹介と貴重なご意見をいただきここに感謝の意を表します。

## 参考文献

Behaghel, O. : *Deutsche Syntax. Eine geschichtliche Darstellung*, Heidelberg, Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, 1924.

Brunot, F. : *Histoire de la langue française des origines à nos jours*, tome I, Paris, A. Colin, 1966.

Buridant, C. : "Les résidus de l'ordre OV en ancien français et leur effacement en moyen français", *Romania*, 108, pp.20-65. 1987.

Cerquiglini, B. : *La Naissance du français*, coll. Que sais-je?, n 2576, Paris, Presses Universitaires de France, 1991. — セルキリーニ『フランス語の誕生』瀬戸直彦・三宅徳嘉共訳、白水社、1994.

Cohen, M. : *Histoire d'une langue : le français*, Paris, Les éditeurs français réunis, 1950.

Foulet, L. : "L'accent tonique et l'ordre des mots : formes faibles du pronom personnel après le

- verbe", *Romania*, 50, p. 54-93. 1924.
- *Petite syntaxe de l'ancien français*, Paris, 1930.
- Gamillscheg, E. : *Romania germanica, Sprach- und Siedlungsgeschichte der Germanen auf dem Boden des alten Römerreiches*, Bd. 1: Zu den ältesten Berührungen zwischen Römern und Germanen. Die Franken, Berlin, 1934.
- Greenberg, J. H. : *Universals of Language*, Cambridge, The M.I.T. Press, 1963.
- *Language Typology, a Historical and Analytic Overview*, The Hague-Paris, Mouton, 1974.
- Greule, A. : *Syntax des Althochdeutschen*, in : *Sprachgeschichte*. Berlin/New York, 1985.
- Haubrichs, W. / Pfister, M. : *In Francia fui, Studien zu den romanisch-germanischen Interferenzen und zur Grundsprache der althochdeutschen, "Pariser (Altdeutschen) Gespräche"*, nebst einer Edition des Textes, Mainz/Stuttgart 1989.
- Herman, J. : *Du latin aux langues romanes, études de linguistique historique*, Max Niemeyer Verlag Tübingen, 1990.
- Holmes, U. / Vaughan, E. : "Germanic influence on Old French Syntax", *Language* IX, 1933, pp. 162-170.
- Kiparsky, P. : "Indo-european origins of Germanic syntax", *Clause structure and language change* edited by Battye, A. & Roberts, I., New York, Oxford University Press, pp.140-169. 1995.
- Marchello-Nizia, Christine. : *L'évolution du français : ordres des mots, démonstratifs, accent tonique*, Paris, Armand colin, 1995.
- Meillet, A. : *Caractères généraux des langues germaniques*, Paris, Librairie Hachette, 1949.
- Richter, E. : *Zur Entwicklung der romanischen Wortstellung aus der Lateinischen*, Halle, 1903.
- Schildt, J. : *Kurze Geschichte der deutschen Sprache*, Berlin, Volk und Wissen Verlag GmbH, 1991.
- ヨアヒム・シルト『[図説] ドイツ語の歴史』橘好碩訳、大修館書店、1999.
- Vanelli, L., Renzi, L. & Benincá, P. : "Typologie des pronoms sujets dans les langues romanes", *Linguistique descriptive ; phonétique, morphologie et lexique*. Actes du XVII<sup>e</sup> Congrès International de Linguistique et Philologie romane, Aix-en-Provence, 1983, vol. 3. Publications Université de Provence, pp. 161-176, 1985.
- Wartburg, W. von : *Evolution et structure de la langue française*, Berne, Francke, 1934. — ヴァルトブルク『フランス語の進化と構造』田島宏、高塚洋太郎、小方厚彦、矢島猷三共訳、白水社、1976.
- 浅野幸生 : 「古仏語における従属節の語順に関する一調査」、*ロマンス語研究* 30、1997.
- 鈴木信五 : 「語順の自由度—イタリア語の場合」、月刊『言語』9月号、pp. 36-41. 2000.